

〔神代卷家傳聞書八〕浮橋ハ舟橋也

〔日本書紀二神代〕皇孫天津彦彦火瓊杵杵尊、略中離天磐座、天磐座能以鑑矩羅、且排分天八重雲稜威之道別道別而天降於日向襲之高千穗峯矣。既而皇孫遊行之狀者、則自穗日ニ上天浮橋、立於浮渚在平處爾。磨梨陀毗邇而陀志、企而脅完之空國自頓丘覓國行去。頓丘此云毗陀烏、覓國此云騰褒屢到於吾田

長屋笠狹之崎矣。

〔釋日本紀八義〕穗日ニ上天浮橋

天浮橋者、天降之義、渡橋之義也。今世如行幸之時、浮橋可象此歟。攝間云、渡浮橋而天降者、天地相近歟。左金吾仰云、伊弉諾伊弉册尊生日神、以天柱舉於天上之時、天地相去未遠之由、見上卷耳。

〔萬葉集十七〕讚三香原新都歌一首并短歌

山背乃久爾能美夜古波春佐禮播花咲乎乎理秋佐禮婆黃葉爾保比於婆勢流泉河乃可美都瀬爾宇知橋和多之余登瀬爾波宇枳橋和多之安里我欲比都可倍麻都良武萬代麻底爾。

〔花鳥餘情十六〕李部玉記、延長六年十二月五日、大原野行幸、卯初主上翻配御輿、著赤色袍自朱雀門交門出御、至五條大路西折、至桂河邊、主上降自御輿就幄、群臣下馬、上御輿、群臣乘馬渡浮橋方舟爲梁、其上敷板、自桂路入野口。○原本有誤脫以扶桑記補正又見新儀式

〔空穂物語祭の使〕かゝるほどに、六月の比ほひにもなりぬ、大將はいけひろくふかく色々のうへき、しにておひたり、水のうへにえださし入などしたるなかじまに、かたはしほ水にのぞき、かたはしほはまにかけて、いかめしきつり殿つくられて、おかしきふねどもおろしうきはしわたし、あつき目ざかりには、人々すみなどし給ふ。

〔源氏物語行幸十九〕亥はすに大原野の行幸とて、世に殘る人なくみさはぐを、六條院よりも御かたがたひき出つ、み給ふ。○略中めづらしうおかしきことにきをひ出つ、その人ともなく、かすか